

含めたこの点の研究が今後の焦点とされて
いると思われる。また確かに、各論文毎に
その対象および研究者の関心の多様さから
普遍的なモデルの構築には至っていない。
しかし既にそこからいくつかの運動の類型
を推定することは可能と思われる。

比較都市研究の上でも、宗教と社会階層
との関連においても、本書は多くの示唆を
与えうるものと考えるので、各方面の方々
に読んでいただきたいと思う。

(A5判 三四〇頁 一九八三年
十一月 刀水書房 五八〇〇円)
(渡邊 伸 京都大学大学院生)

Norman Housley

The Italian Crusades

十字軍といえ、一般には聖地解放及び
聖地國家の維持を目的としてなされた軍事
行動を理解するのが普通であろう。しかし
実際には聖地を対象とするもの以外に、種
々の十字軍が存在した。即ち、聖地以外の
地域(スペインや北東欧)の異教徒に対す
る十字軍、異端に対する十字軍(例えばア
ルビジョア十字軍)、教皇の政敵に対する
十字軍等である。

こうした所謂「非聖地十字軍」について
は、従来、本来的な十字軍たる聖地十字軍
からの「逸脱」「乱用」として、ネガティ
ヴに評価されがちであった。そして、その
背景には、聖地十字軍の持っていた「宗教
的動機」から「政治的世俗的動機」への移
行、即ち十字軍の「政治化」「世俗化」と
いう理解が存在していた。

このような理解の問題性については、既
に紹介者は別稿(「非聖地十字軍」と十字軍
の「政治化」、『月刊歴史教育』三号、一九七
九年六月)で論じたことがあるのだが、そ
の後本誌紹介欄で取り上げた Riley-Smith
の二著(What Were the Crusades? 『史
林』六二巻六号、一九七九年十一月。The
Crusades 『史林』六五巻五号、一九八二年
九月)も、そうした聖地限定論への反駁に
力を注いでおり、「非聖地十字軍」の重視
は近來の一つの傾向と言えるであろう。

本書の著者 Housley は、この Riley-S-
mith に師事し、「非聖地十字軍」の内、
特に教皇の政敵に対する十字軍を取り上げ
る。表題の「イタリア十字軍」とは、「一
二五四年と一三四三年の間のイタリアにお
けるキリスト教世俗権力に対する十字軍」

である。一般には「政治的十字軍」と呼ば
れるものであるが、著者の立場はこれを採
る所とはならず、まず序論冒頭において、
「政治的」という名称の誤りであることを
確認することから始める。

構成は序論と七章及び結論からなっており、序論においては、研究史を概観した後、
この十字軍については、包括的研究が殆ど
なされて来なかったこと、にもかかわらず
それが教皇権と十字軍運動に対して与えた
結果(実際には損傷)に関しては一般的理
解が存在していることを指摘する。即ち、
イタリア十字軍は同時代人の憤慨を巻き起
こし、キリスト教世界の精神的リーダーと
しての教皇の権威を低下させたこと、この
十字軍のために課せられた税も教皇の権威
を傷つけ、特にそれを通じて俗権の興隆を
もたらしたことが、教皇によるイタリア十字
軍重視は必然的に聖地十字軍の人的・物的
涸渇を結果し、聖地國家の滅亡を早めたこ
と、更には、十字軍運動全体に対する幻滅、
贖宥の効力に対する疑念、キリスト教的良
心の麻痺をもたらし、懷疑主義が生ずるに
至ったというものである。

いわば中世後期の重要な諸相をここから

導き出すことになってしまふのだが、これに対する再検討を行なうこと、特に同時代史料に則してそれを行なうことが、本書の出発点である。

第一章 The Papal-angvin Alliance and the Italian Crusades では、議論の前提として、事実関係とクロノロジーの整理が行なわれる。即ち、シチリア王国を巡ってマンフレートに対する十字軍に始まり、シャルル・ダンジュ、コンラディン、シチリアの晩禱、対アラゴン十字軍と続く。一四世紀に入ると舞台は北・中部イタリアへ移り、この地のギベリンに対する十字軍が中心に述べられる。

第二章 Papal Justification of the Italian Crusades では、こうしたキリスト教徒に対して十字軍を用いることの正当性を裏付けようとした教皇側の論理が説明される。即ち、一つはこれが信仰の防衛に関する戦争であるということ、今一つは聖地十字軍との密接な結びつきにあるということである。

第一の点に関しては、教皇領及びシチリア王国が教会と信仰とにおいて持っている重要性の指摘に始まり、敵対者と異端とを

結びつける議論へと発展する。第二の点については、イタリア十字軍を聖地十字軍より上位に或いは少なくとも同等なものと考え、主張と並んで、聖地十字軍にとってシチリア王国が持っていた重要性に鑑み、イタリア十字軍を聖地十字軍への予備段階と捉える理念が存在した。いずれにせよ、イタリア十字軍は全キリスト教徒、全キリスト教世界に関するものとして提示されたのである。

第三章 Papal Crusade Policy in Practice の主題は、聖地十字軍とイタリア十字軍との利害衝突についてである。イタリア十字軍の高揚期は東方情勢の悪化期に一致しており、このことは教皇のイタリア政策推進にとり各方面からのプレッシャーとなつて現われた。本章前半ではこの具体相を検討し、教皇は一定の譲歩を強いられつつも、基本的にはイタリア重視であったことを跡づけている。後半では、その顕著な表現として、東方向けの十字軍誓約や資金等のイタリアへの転用が述べられる。

最後に、こうした教皇の政策についての同時代人の評価が、十字軍資金の転用に関してと、教皇の政策全般に関してに分け

て考察される。前者については、かなり広範な不満が存在したようであるが、後者については必ずしも明白ではない。批判的世論として従来引用されて来たものは反教皇的史料であり、同様にその擁護に喧しい親教皇的史料が見出される。そして中立的世論の動向を知るのは史料的に困難である。結局、著者は、後述されるイタリア十字軍徴募の成功と、「深い黙認」とを指摘するに留めている。

第四章 The Preaching and Organization of the Italian Crusades は、イタリア十字軍の勧説について、それが行なわれた地域、その担い手、方法等の具体像、又、十字軍士に与えられる贖宥や特権及び義務、その他の細目、更には勧説に対する障害について論述する。

続く第五章 The Crusade Armies in Italy and the Crusade Ethos では、こうした勧説に対する応答を検討することにより、勧説の成否が考察される。これは史料的制約により簡単に答が出せないのだが、二つの点は明白である。即ち、イタリア十字軍には非常に多様な地域と階層からの出自が認められること、及び勧説は常には

ないにせよ非常に屢々効果的であったことである。

第五章後半では、イタリア十字軍を特徴づけたエートスを考察し、巡礼という要素を除けば、聖地十字軍と同じものが存在したことを結論づける。しかし、そのことから、聖地十字軍と同様にイタリア十字軍の失敗は教皇にとって説明困難であり、敵の側からの批判を利する危険があったことも指摘している。

第六章と第七章はThe Financing of the Italian Crusades (1) : (2)に於て、イタリア十字軍のための財政を扱う。第六章では、まず各種の収入源を列挙し、次いで聖俗双方からの反抗と教皇の対応を考察する。第七章は徴収と運用の実際を論じている。そして、財政に関しては、一三世紀はかなり危機的であったが、アヴィニヨンの教皇、特にヨハンネス二二世の時には改善されたことを指摘し、アヴィニヨン教皇庁の特徴たる財政的発展は、イタリア十字軍の所産であったと結論する。

介
最後に以上を総括して、まず序論において列挙されたイタリア十字軍への通説に反論を加える。即ち、イタリア十字軍に対す

る非難や憤慨が一般的な世論であったことは証明できず、その正当化のために教皇庁が展開した議論は、反教皇的ではないすべての人々に受け容れられたこと、その勧説に対する反応は好意的であったことである。そして、イタリア十字軍が十字軍運動の衰退をもたらしたという主張もあまり説得的ではなく、贖宥の価値への信頼が失われた証拠は殆どなく、十字取得が行なわれなくなったということも疑わしい。

教皇権の衰退についても再検討が加えられる。即ち、イタリア十字軍を巡る敵側の反教皇的プロパガンダが、中立的な人々を説得した証拠はなく、イタリア十字軍のための課税と俗権による教会支配の明確な因果連鎖もない。むしろ教皇の威信を損なったものは、十字軍そのものではなく、イタリアに教皇権を確立することに失敗したことであった。

かくして、イタリア十字軍にはよりポジティブな意味が与えられる。即ち、イタリア事情に関しては、ゲルフの側に付された聖戦としての性格がその統一を維持するイデオロギーの支柱になったことであり、一方、十字軍運動に関しては、財政努力であ

る。

しかし、最後に著者が強調するのは、財政以外の領域では殆ど根本的な変更は行なわれなかったこと、むしろ、イタリア十字軍は本質的な点で東方やその他の十字軍と殆ど違わないことである。イタリア十字軍は、勧説、組織、特権、義務、エートスにおいて東方十字軍と同じであり、更に、多くの同時代人もこの同質性の解釈を受け容れていた。十字軍は信仰の敵に対して行なわれる聖戦であり、それが何処の誰であってもよかった。教皇は、世論の酷評を受けながらも、内なる敵に対しても十字軍を組織し、勧説し、遂行することができたのである。

以上、本書は史料を広く渉猟した力作であり、内容的にも示唆に富んでいる。この種の紹介では詳しく立ち入れなかった事実関係の部分についても興味深い知見が多い。全体の論旨が、最初に述べた「非聖地十字軍」を巡る問題に対して持っている意味については言うまでもないであろう。

(二九三頁 一九八二年 Oxford,
Clarendon Press)
(八塚春児 京都教育大学助教授)